View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kanazawa University Repository for Academic Resources

金沢大学資料館所蔵考古資料の再整理

Rearrangement of Archaeological Materials owned by
Kanazawa University Museum

金沢大学資料館特任助教　松　永　篤　知
Atsushi MATSUNAGA

1. はじめに

金沢大学資料館には、実に様々な資料が収蔵されている。旧制第四高等学校（以下、四高）の物理実験機器、加賀藩校および四高の扁額、金沢大学創設資料、梅田家資料、石川県師範学校郷土教育資料、医学教示図、キノコムラージュ標本など、枚挙にいとまがないほどである。その数は、2017年の時点で、古文書を含むモノ資料7万5千点以上、公文書資料1万1千点以上と、総計8万6千点以上に及ぶ（金沢大学資料館2017）。

その中には、遺跡の発掘調査や表面採集で得られた考古資料も多数含まれる。その内容を見ると、北陸地方を中心とする全国各地の土器・陶磁器や石器・石製品、埴輪、瓦、金属製品、木製品など、非常に多岐に渡る。

本稿では、この金沢大学資料館所蔵考古資料について、現在の状況を整理し、資料の再評価をおこなう。より具体的に言えば、遺物の種類・出土地・時代などを再整理し、現時点で把握できる情報を可能な限り提示する。その上で、これまでの研究史や現在の考古学的知見を踏まえて、当該資料の学術的価値について述べる。資料館所蔵の考古資料が、具体的にどのようなものであるか、本稿を通じて少しでも多くの方に知ってもらい、今後の本格的な資料公開へとつなげたい。

2. 資料の概要

金沢大学資料館所蔵考古資料は、資料館の台帳上の資料群名では、「四高考古資料」・「井上鋭夫発掘資料」・「一乗谷朝倉氏遺跡出土資料」の三つが主体となる。資料について検討する前に、これらの概要について述べておきたい。

まず、四高考古資料は、金沢大学の前身校である旧制第四高等学校旧蔵の考古資料を受け継いだもので、明治時代から大正時代にかけて、石川県・富山県・福井県を中心とする各地（東北地方～九州地方および朝鮮半島）で採集された遺物群である。その核となるのは、明治28年に創設された北陸人類学会による採集遺物である（在田1996）。これらの時代と種類を見ると、縄文時代から古墳時代にかけての土器・土製品（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・埴輪）や石器（石鏃・打製石斧・磨製石斧・凹石・石皿・石錘など）を中心とするが、中には古代の須恵器・瓦や中世の

珠洲焼など、歴史時代のものも含まれる。さらに、朝鮮半島出土の石器や、出土地・時期不明ながら動物遺体（シカの角、小型鯨類の椎骨、サルボウガイの貝殻など）もあり、大抵の遺物が揃っていると言っても過言ではない。

続いて井上鋭夫発掘資料は、金沢大学法文学部の教員であった、歴史学者の井上鋭夫氏が発掘調査などによって得た遺物群である。特に、かつて金沢大学のキャンパスがあった金沢城跡の発掘調査（井上1969）における出土遺物（近世陶磁器や瓦など）が主体となる。金沢大学資料館には、金沢城跡以外の遺物も井上鋭夫発掘資料として多数登録されており、北陸地方から九州地方にかけての土器・陶磁器・瓦などが当該資料の箱に収蔵されている。ただ、今回筆者が井上鋭夫発掘資料を実見したところ、金沢城跡以外の井上鋭夫発掘資料の中には、四高考古資料と遺物の特徴や出土地点、注記の仕方などが同じものが少なからず見受けられた。すなわち、本来四高考古資料であったものが混在している可能性があり、今後見直しをかける必要がある。

一乗谷朝倉氏遺跡出土資料は、井上鋭夫氏が発掘調査によって得た遺物群のうち、福井県福井市所在の一乗谷朝倉氏遺跡（現在は国の特別史跡）から出土した遺物を一括したものである（在田ほか1995）。当然のことながら最も多いものは戦国時代の越前焼で、ほかに同時期の土師質土器皿・瀬戸美濃焼・中国陶磁器・石造物・金属製品などが含まれる。

これら三つの資料群以外にも、「暁烏陶磁器コレクション」や「西村コレクション」に考古資料がある。前者は、真宗大谷派の宗教家であった暁烏敏氏による、全国的な陶磁器コレクションであるが、その中に縄文時代から古墳時代にかけての土器や朝鮮半島出土陶磁器（佐々木2001）などが含まれる。一方、後者は、暁烏敏氏の弟子であり、金沢大学教育学部の教員であった西村見暁氏が昭和37年にエルサレムの古物商から一括購入したもので、ベツレヘムから出土したという土器・土器ランプ・青銅器・ガラス器から成る（佐々木ほか1997a・b）。

さらに、考古資料そのものではないが、考古学に関係するものとして、「四高同窓会旧蔵資料」の中に、銅鏡（三角縁神獣鏡・内行花文鏡）・埴輪・家形石棺・百萬塔などの模型がある。これらも、考古学を学ぶ上で、十分参考となる資料である。

3. 資料の再整理

それでは、金沢大学資料館所蔵考古資料を、改めて時代ごとに整理してみたい。古い時代から順を追って、当館にどのような考古資料があるか、今回筆者が実測した一部資料を例示しながら、具体的に見ていくことにする[1)]。

1）縄文時代の遺物

金沢大学資料館所蔵考古資料のうち、最も古いものは、縄文時代に遡る。四高考古資料の中に、縄文時代前期から晩期までの、縄文土器（佐々木ほか1996a）・石鏃・打製石斧・磨製石斧（佐々木ほか1996b）・凹石・石皿・石錘などが多数認められる。出土地（採集地）は、不明なものも多いが、石川県・富山県・福井県の北陸地方三県のほか、概観しただけでも東北地方（岩手県）や関東・甲信越地方（茨城県・千葉県・長野県）のものが含まれていることを確認した。

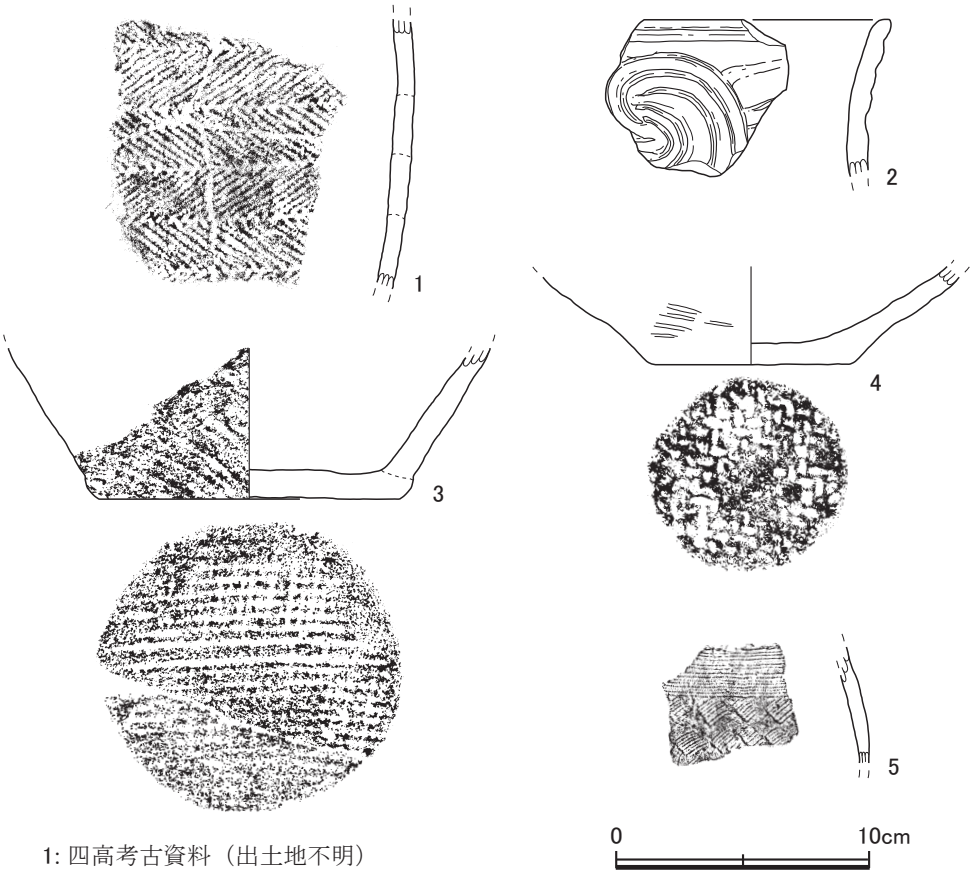
図1-1～4は、金沢大学資料館所蔵の縄文土器のうち、今回筆者が実測したものである。図1-1は羽状縄文が施文された体部片で、出土地不明ながら縄文時代前期に位置づけられる。図1-2は河北郡刈安（現津幡町）出土の口縁部片で、半隆起線による渦巻文を有することから縄文時代中期中

葉（上山田・天神山式土器様式の範疇内）に位置づけられる。図1-3・4はともに出土地不明の土器底部片であるが、形態・調整・文様などから見て、前者は中期、後者は晩期のものであろう。なお、図1-3には日本海側地域の特徴であるスダレ状圧痕が、図1-4には全国的によく見られる2本超え2本潜り1本送りの網代圧痕が残されている。

なお、前述したように、暁烏陶磁器コレクションの中にも縄文土器があり、筆者が確認したのは東北地方の晩期土器であった。

2）弥生時代の遺物

弥生時代の遺物としては、四高考古資料の中に、石川県などの弥生土器（壺・甕・高杯、中期～後期）を確認した。図1-5は、大野濱（現金沢市）出土の弥生土器片で、櫛描文（平行横線文・斜行短線文）の特徴などから見て、弥生時代中期の小松式土器の壺肩部と考えられる。



1: 四高考古資料（出土地不明）
2: 四高考古資料（河北郡刈安 ※現津幡町）
3: 四高考古資料（出土地不明）
4: 四高考古資料（出土地不明）
5: 四高考古資料（大野濱 ※現金沢市）

図1　金沢大学資料館所蔵の縄文土器・弥生土器

3）古墳時代の遺物

古墳時代の遺物としては、四高考古資料の埴輪（巫女・騎馬男子各1点）が専門家の間でよく知られている（図2および写真）。これは、明治24年に石川県羽咋郡北川尻村（現宝達志水町）で発見されたもので（北陸人類学会1898）、小松市矢田野エジリ古墳から出土した6世紀の埴輪と近似性が高い（小松市埋蔵文化財センター2013）。

具体的には、巫女埴輪（襷掛け袈裟衣）・騎馬男子埴輪ともに須恵質であることが最大の特徴で、両者とも脇部に孔が認められる。いずれも頭部・腕部・基台部（脚部）の大半を欠いているが、少なくとも巫女埴輪は、別造りの基台と衣裾を接合した後に衣裾の上から胴部を積み上げており、まさに矢田野エジリ古墳出土埴輪と同様の製作技法による人物埴輪なのは間違いない。

四高考古資料には、北川尻や福井県坂井郡椀子山（現坂井市）から見つかった円筒埴輪片も多数含まれており、今後埴輪研究の資料として積極的に活用すべきであろう。

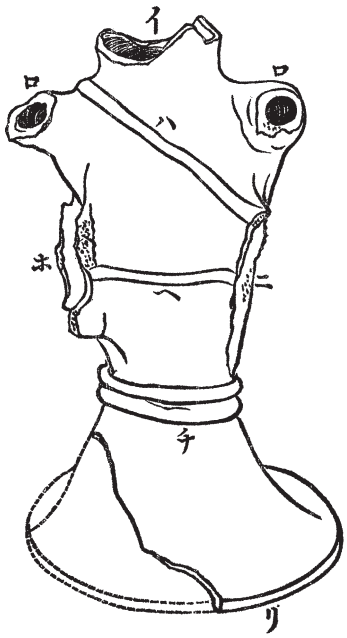


図2　北川尻村発見埴輪の紹介図
（北陸人類学会1898、p.7 より）

写真　北川尻村発見埴輪（左：巫女埴輪、右：騎馬男子埴輪）
（「金沢大学資料館 Virtual Museum Project」、http://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/ より）

埴輪以外にも、該期の須恵器（蓋杯・提瓶・瑞など）や土師器（高杯など）の存在を、四高考古資料の中に確認した。これらは、基本的に石川県内で出土したものであるが、徳島県の須恵器杯身も1点確認した。図3上段に、古墳時代後期～終末期（6世紀～7世紀）の須恵器蓋杯のうち、今回筆者が実測した杯身（図3-1）と杯蓋（図3-2）を例示する。両者とも、河北郡気屋（現かほく市）のものである。

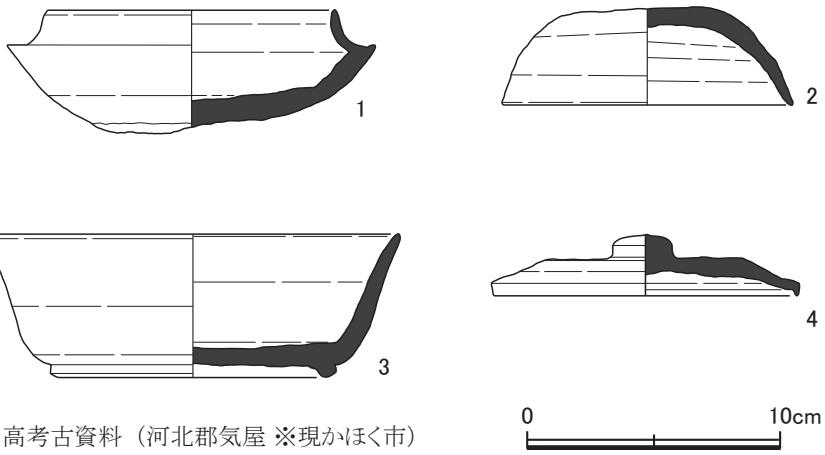
さらに、暁烏陶磁器コレクションにも、該期の須恵器高杯などがある。

4）古代の遺物

古代の遺物は、四高考古資料に須恵器蓋杯や瓦などがある。須恵器は概ね石川県のものを確認したが、瓦は東京都武蔵国分寺のものである。図3下段に、8世紀～9世紀の須恵器杯身（図3-3）・杯蓋（図3-4）を例示する。前者は四高敷地出土、後者は高松町余地（現かほく市）出土である。

5）中世の遺物

中世の遺物としては、一乗谷朝倉氏遺跡出土資料[2]が最も充実している。具体的には、福井県で焼かれた越前焼を中心とする、戦国時代の各種土器・陶磁器（土師質土器皿・瀬戸美濃焼・青磁・白磁・染付など）や笏谷石製の石造物（阿弥陀如来像石板など）、金属製品（釘・銭貨など）が含まれる。図4-2は、これら一乗谷朝倉氏遺跡出土資料のうち、越前焼の甕口縁部片である。小林谷口青木地点出土のもので、16世紀代（総合調査編年Ⅴ期：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2016）に位置づけられる。なお、本資料群の石造物（在田ほか1995）は、単なる考古資料としてだけでなく、福井市足羽山麓産の火山礫凝灰岩として有名な笏谷石の岩石標本としての価値も見出すことができよう。



1: 四高考古資料（河北郡気屋 ※現かほく市）
2: 四高考古資料（河北郡気屋 ※現かほく市）
3: 四高考古資料（第四高等学校敷地）
4: 四高考古資料（高松町余地 ※現かほく市）

図3　金沢大学資料館所蔵の須恵器蓋杯

また、四高考古資料の中に、ほとんど出土地不明ながら、石川県で焼かれた中世珠洲焼も少なからず含まれている。図4-1に示したものは、やはり出土地不明の珠洲焼擂鉢であるが、傾きやおろし目から見て、15世紀前半頃（吉岡編年Ⅴ期：吉岡1994）に位置づけられる。

そのほか、金沢城域から得られた中世石造物として、本丸跡に置かれていた火山礫凝灰岩製石層塔（あるいは宝篋印塔）塔身1点（三浦1994）と、御宮跡から出土した凝灰岩製宝塔笠1点・五輪塔水輪2点（三浦1997）がある。本丸跡のものは14世紀中頃、御宮跡のものは15世紀前半から中頃の位置づけが示されている。

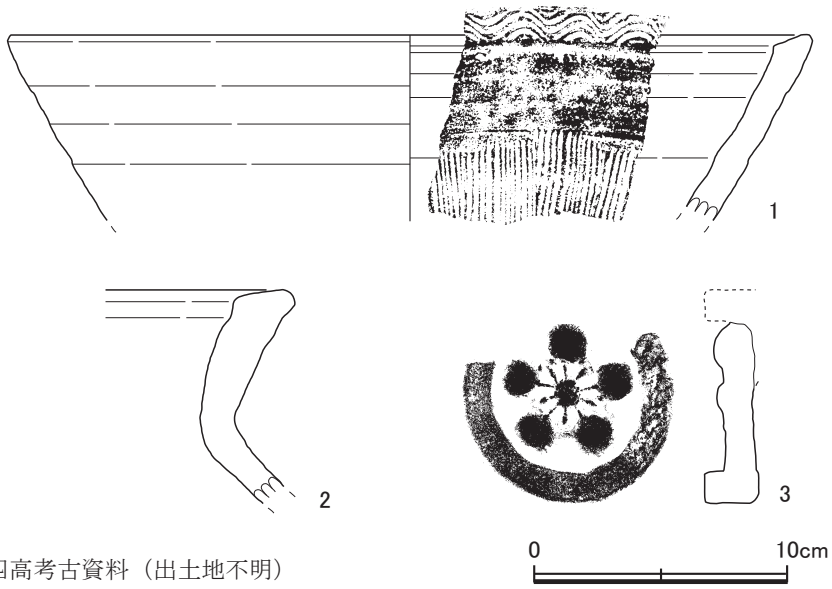
6）近世の遺物

近世の遺物としては、井上鋭夫発掘資料の金沢城跡出土遺物が代表的である。本丸・二の丸・三の丸などから出土したもので（井上1969）、近世の土器・陶磁器（染付・越前焼・土師質土器など）や各種瓦（粘土瓦・鉛瓦）が多数を占め、ほかに下駄や硯、釘などがある。図4-3に、二の丸から出土した軒桟瓦の丸部片を示す。釉薬瓦の類で、丸部の瓦当文様は梅鉢文（梅鉢Ⅲ類：石川県金沢城調査研究所2010）である。

7）その他

四高考古資料の中に、朝鮮半島咸鏡北道出土の石器が含まれている。多くは、石斧の類であり、おそらく青銅器時代（無文土器時代）のものであろう。

また、暁烏陶磁器コレクションに、朝鮮半島出土の高麗・李朝・中国陶磁器が含まれている。李王職庶務課長の末松熊彦氏が、暁烏敏氏に高麗陶磁標本として贈ったもので、全羅南道で出土した



1: 四高考古資料（出土地不明）
2: 一乗谷朝倉氏遺跡出土資料（小林谷口青木）
3: 井上鋭夫発掘資料（金沢城跡二の丸）

図4　金沢大学資料館所蔵の中世陶器・近世瓦

ものと見られる。これらについては、金沢大学文学部の考古学教員であった佐々木達夫氏（現名誉教授）らが実測・報告している（佐々木2001）。

さらに、西村コレクションとして、伝ベツレヘム出土の土器ランプ・土器・ガラス器・青銅器がある。土器ランプについては、やはり佐々木達夫氏らが実測・報告しており、ローマ時代～イスラム時代の年代が示されている（佐々木ほか1997a・b）。

4. 資料の学術的価値

以上のように、金沢大学資料館所蔵考古資料は、非常にヴァラエティに富んでいる。様々な時代、様々な地域、様々な種類の遺物が揃っているという点で、その学術的価値は高い。

時代について言えば、旧石器時代や縄文時代草創期・早期といった、特に古い時期の遺物は確認していないが、少なくとも縄文時代前期以降各時代の遺物を一通り見ることができ、土器・陶磁器を中心に、日本列島における物質文化の変遷を追うことが可能である。

地域について言えば、残念ながら出土地不明なものも少なくないが、それでも石川県・富山県・福井県を中心に、東北地方から九州地方までの日本列島各地の資料を確認している。加えて、朝鮮半島出土石器・陶磁器や伝ベツレヘム出土品のような海外の資料もある。そのように見ると、金沢大学資料館所蔵考古資料は、物質文化の地域性を知る上でも有用な資料と言えよう。とりわけ、上山田・天神山式土器や小松式土器、珠洲焼、越前焼、笏谷石製石造物といった北陸地方ならではの遺物は、金沢大学が持つ特徴的な地域資料として、特に大切にすべきである。

遺物の種類について言えば、考古学の基本である土器・陶磁器をはじめ、石器・埴輪・瓦・金属製品・木製品・動物遺体・ガラス器など、実に豊富である。その点では、これらの資料を通じて、物質文化の多様性を学ぶことができよう。また各種遺物ごとに、今後考古学的な個別研究を展開することも大いに期待できる。

加えて、資料が当館に収蔵されるまでの経緯も学史的に重要である。北陸地方における考古学の先駆的存在である北陸人類学会（在田1996・1997）から四高へ、さらに金沢大学へと資料が受け継がれて来たことは、すなわち石川県において考古学が連綿と続いて来たことを物語る。事実、石川考古学研究会は70年に及ぶ歴史を持ち、金沢大学考古学研究室も40年以上の歴史を持つ。現在に至るまで、様々な考古資料が収集・寄贈・収蔵されて来たことからも、金沢大学の内外には、考古学に理解のある識者が絶えずいたことがうかがえよう。

そのほか、遺物模型も合わせれば、これらの資料を、日本考古学に軸を置いた歴史教育にも活用することができる。考古資料である以上、当然考古学的な価値が基本であるが、使い方によっては教育学的な価値も引き出せると考える。

5. おわりに

以上のように、金沢大学資料館所蔵考古資料には、多くの学術的価値がある。今回筆者が大まかに情報整理しただけでも、それは明らかである。今後より細かく資料の再整理を進めれば、その価値はより一層高まっていくはずである。

しかし、2018年1月現在、資料館の展示室に考古資料は並んでいない。本稿で得た知見を生かしつつ、できるだけ早く地下収蔵庫の考古資料を展示に出していきたい。常設展だけでなく、考古

学系の企画展・特別展も視野に入れ、当該資料の有効活用を図りたい。

筆者は、資料館業務に関してまだまだ不慣れであり、考古資料の展示および活用について、多くの方からご意見を頂ければ幸いである。

本稿は、平成29年度石川県博物館協議会職員研究奨励事業（研究テーマ名「金沢大学資料館所蔵考古資料の再評価」）の助成金による成果の一部を含んでいる。本研究にご助成頂いた石川県博物館協議会の皆様に、心より感謝申し上げたい。

註

1）資料の年代観に関しては、『総覧 縄文土器』（小林ほか2008）、『日本土器事典』（大川ほか1996）、『中世須恵器の研究』（吉岡1994）、『越前焼総合調査事業報告』（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2016）などを参考にした。

2）一乗谷朝倉氏遺跡出土資料については、昭和45年に井上鋭夫氏と福井大学教育学部の重松明久氏の指導の下、金沢大学考古学クラブ・福井大学教育学部の学生によって緊急調査（農業構造改善事業の水田区画整理が原因）がおこなわれた時に出土したものと見られる。それが、保存のための緊急避難措置として金沢大学に移送され、そのまま資料館に引き継がれたようである（在田ほか1995）。

参考文献

在田則子・橋爪直子・三浦純夫 1995「一乗谷朝倉氏遺跡出土資料について」『資料館だより』第6号、pp.2-4

在田則子 1996「四高考古資料と北陸人類学会」『資料館だより』第7号、pp.10-11

在田則子 1997「北陸人類学会群像」『資料館だより』第10号、pp.8-10

石川県金沢城調査研究所 2010『金沢城跡石垣修築工事報告書―玉泉院丸南西石垣―』

井上鋭夫 1969「金沢城址の発掘」『金沢大学法文学部論集 史学編』16、pp.1-30

大川清・鈴木公雄・工楽善通ほか 1996『日本土器事典』

金沢大学資料館 2017『金沢大学資料館 紹介リーフレット 平成29年度版』

小林達雄ほか 2008『総覧 縄文土器』

小松市埋蔵文化財センター 2013『重要文化財 矢田野エジリ古墳出土埴輪の世界』

佐々木達夫・在田則子・橋爪直子・波頭桂 1996a「金沢大学資料館所蔵考古学資料紹介（1）」『資料館だより』第7号、pp.6-9

佐々木達夫・在田則子・大浜菜緒 1996b「金沢大学資料館所蔵考古学資料紹介（2）」『資料館だより』第8号、pp.8-10

佐々木達夫・在田則子・波頭桂 1997a「金沢大学資料館所蔵考古学資料紹介（3）」『資料館だより』第9号、pp.8-11

佐々木達夫・在田則子・波頭桂 1997b「金沢大学資料館所蔵考古学資料紹介（4）」『資料館だより』第10号、pp.2-6

佐々木達夫 2001「朝鮮半島出土高麗・李朝・中国の陶磁器」『資料館だより』第18号、pp.2-5

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016『越前焼総合調査事業報告』
北陸人類学会 1898「北陸発見埴輪図説」『北陸人類学会志』第2編、pp.6-10
三浦純夫 1994「金沢城本丸跡の石造遺物」『資料館だより』第5号、pp.5-7
三浦純夫 1997「金沢城御宮跡出土の石造遺物」『資料館だより』第9号、p.5
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』